

障害者支援施設における知的障害者の生活と空間利用の実態 ～築 45 年を迎える F 施設における分析～

キーワード：知的障害，空間利用，滞在様態，建て替え
障害者支援施設

石井研究室 長内 友磨
土岐 瞭太郎
畠山 直人

1. 研究の背景

2018 年における身体、知的、精神の各障害者を合計すると、約 937 万人と推計されている（厚労省）。2013 年の推計より約 149 万人増加、日本の全人口に占める割合も 6.2% から 7.4% に増加した。2014 年から 2016 年までに実施した障害者への生活実態調査からの推計では、身体障害者は約 436 万人（約 42 万人増）、知的障害者が約 108 万人（約 34 万人増）、精神障害者が約 392 万人（約 72 万増）となった。

いずれも高齢障害者が増加傾向にあり、65 歳以上の割合は身体障害者の 74%（前回 69%）、知的障害者が 16%（同 9%）、精神障害者が 38%（同 36%）だった。高齢化に加え、障害への理解が進んで障害認定を受ける人が増えたことも増加要因と分析している。

また障害福祉の理念としては、すべての人が自宅・地域での生活を送ることが理想とされており、地域移行が進められてはいる。しかし障害の程度や状況、地域における受け皿整備の課題等もあり、施設利用（入所・入居）を余儀なくされている人がいるのが現状である。障害種別での施設入所の状況をみると、身体障害では 1.7%、精神障害では 8.0% に対して、知的障害では 11.1% となっており、特に知的障害者の割合が高い。

2. 研究の目的

本研究では、宮城県 F 施設内の 3 つある園のうち重度の知的障害者が対象の O 園を調査対象とした。同施設は O 園を含めて開設から 45 年を経過し、建物の老朽化が進んでいることから 2023 年の建て替えが計画されている。従来の支援のための入所施設環境から、個室を基本として居住空間の充実を図り、入所者一人ひとりの生活を支える施設に転換しようとしている。

本研究の目的は、長期間にわたって同施設の環境の中で生活してきた入所者が、新たな環境になじんでいくプロセスや新たな環境が与える様々な影響を、現在の環境での生活様態との比較考察を行うことにより明らかにすることにある。重度の知的障害者にとっての居住環境や施設環境の在り方を考察し、今後の施設計画につなげるための知見を得ることを目指す。

本論文では、特に建て替え前の利用者の日常生活の実態をとらえ記録・分析することで、新施設移行前の状況を確認し、建て替え移行後の研究につなげるものとする。

3. 調査対象・調査方法

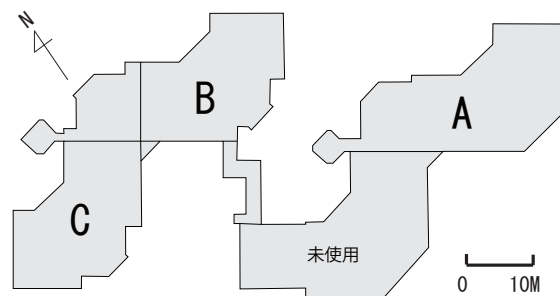


図 1 調査対象施設 O 園の配置概略

表 1 ファミリー別入居者属性

	Aファミリー	Bファミリー	Cファミリー
入所人数(人)	20	18	19
男性(人)	20	18	19
平均年齢(歳)	50.6	45.8	43.9
平均入所年数(年)	15.7	15.4	25.6
知的障害以外の障害を含む人数(人)	3	3	1
平均支援区分	4.60	4.61	5.21

3-1 施設概要

本研究の調査対象の F 施設は、宮城県黒川郡大和町にある。3 つの園に分かれて居住棟があり、それぞれ入所利用者の特性ごとに性格付けがされている。

今回の調査対象の O 園は、重度の知的障害を持つ利用者が多く入所しており、利用者は男性 57 名、女性 0 名で、3 つのファミリーで構成されている（図 1）。ここで言うファミリーとは、約 20 名で構成された生活の場を共有するグループのことである。表 1 に示すように現在は A に 20 人、B に 18 人、C に 19 人が入所している。平均年齢は 40 ～ 50 歳、入所期間は平均で 15 ～ 25 年、支援区分は平均 4.6 ～ 5.2（6 段階）となっていて、長期入所・重度入所者が多いことがわかる。

3-2 調査方法

調査は、2018 年 10 月 31 日（水）から 11 月 1 日（木）の 2 日間に渡って行った。初日は、施設内の部屋の位置や、家具の配置などを確認し平面図に書き込む作業（予備調査）を実施し、2 日目は午前 5 時から午後 8 時までの 15 時間、利用者全員の行動観察調査を行った。

各ファミリー調査員 3 人体制（交代制）で行い、各ファミリーを 2 つに分けて各 1 人ずつ調査員が滞在して調査を実施した。5 分毎に入所者全員の「滞在場所」「滞在の姿勢」「行動・行為」を個々を識別した上で施設平面図にプロットしていく手法を採り、全員の空間利用の様

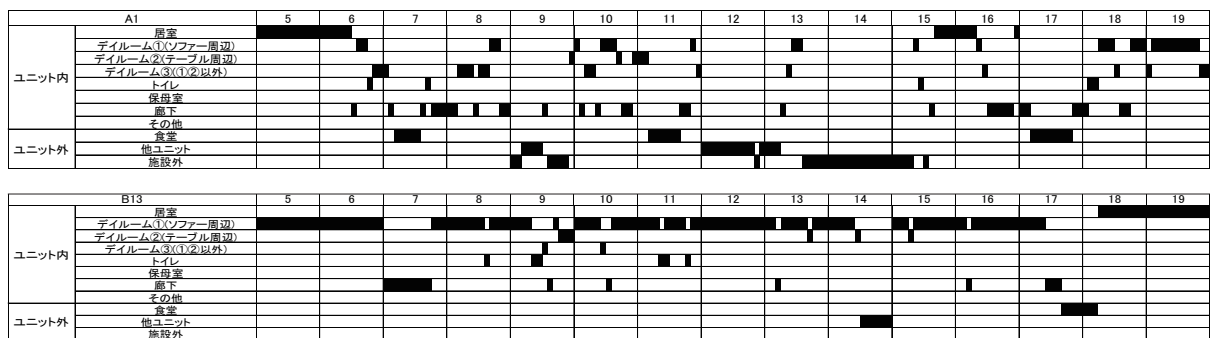


図2 一日の中での滞り場所の様態（上：移動頻度の少ない人の例，下：移動頻度の多い人の例）

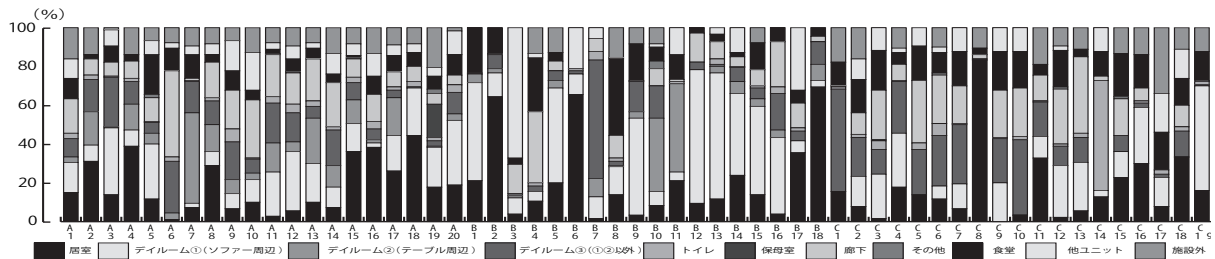


図3 個人別・滞り場所別にみた構成割合

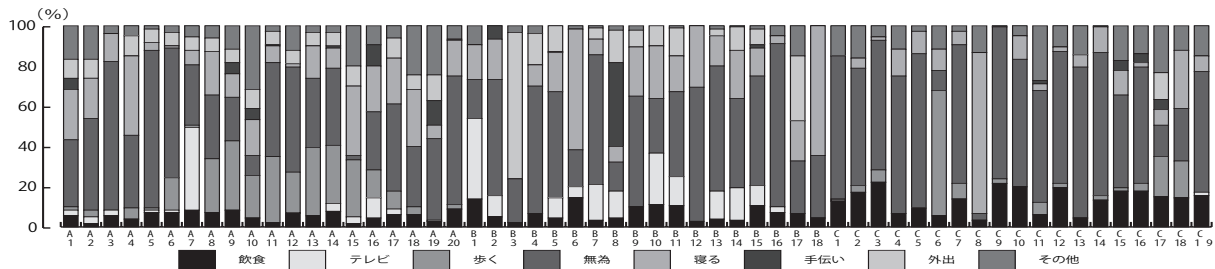


図4 個人別・行為別にみた構成割合

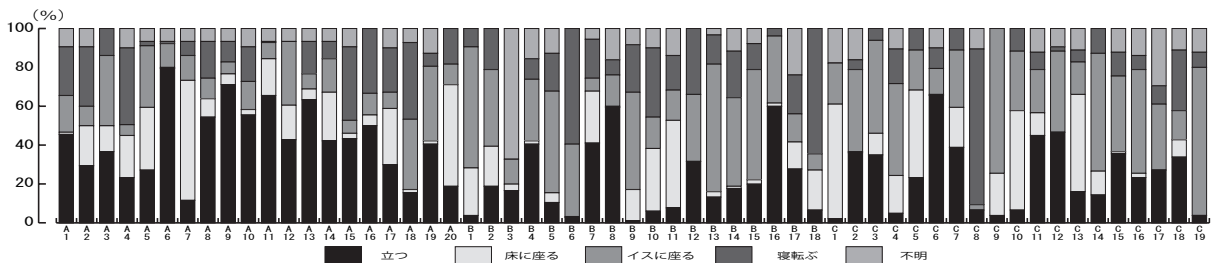


図5 個人別・滞り姿勢別にみた構成割合

態を記録した。5時から20時までの15時間、合計180枚（2領域分）の記録シートを各ファミリー収集し、その記録から入所者個々の状況を分析した。

4. 調査結果

4-1 個人別・滞り場所の分析

利用者別の滞り様態を分析すると2つのパターンが存在することが分かった。1つは1日を通して施設内を動き回るパターンである（図2上）。食事や日中活動以外の時間でダイニングと廊下を行き来している。2つ目は、一定の場所での滞り時間が長いパターンである（図2下）。このタイプの入居者は「ダイニングのソファ周辺」で排泄や食事以外の多くの時間を過ごしている。以上のように、移動を中心とするタイプと、自身での滞り場所を持ち、そこで長時間過ごすタイプである。

個人別に滞り場所別の割合を見ると、全体的に「居室」と「ダイニング」での滞在率が高い（図3）。「居室」中心の滞在型と、「ダイニング」中心の滞在型があることがわかる。現在の建物の居室は多床室中心だが、建て替えによる居室の個室化が与える影響は今後注目される。一部の入居者の中には、廊下やトイレなどで多くの滞りが見られた利用者も存在した。通常、廊下は移動空間として位置づけられるが、このような滞りも多くあることが特徴である。特に「廊下」での滞在割合の大きかったA6さんは1日の半分近く（44.4%）を廊下で過ごしていた。1日の20%以上を廊下で過ごす利用者は57名中15名いた。これらのことは、移動空間としての廊下ではなく、滞在空間としての廊下の役割があることが示されたものであり、「居場所」として位置づけ検討してい

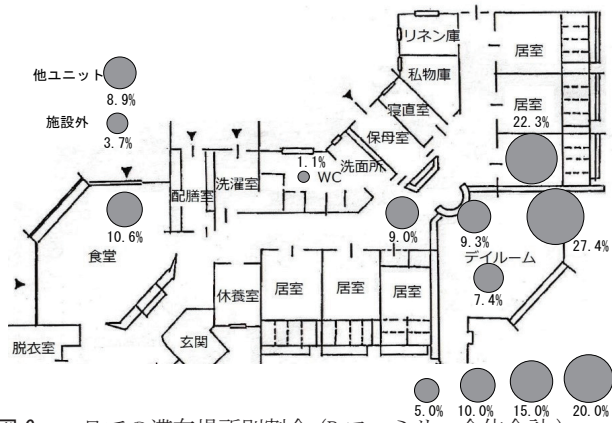


図6 一日での滞在場所別割合 (Bファミリー全体合計)

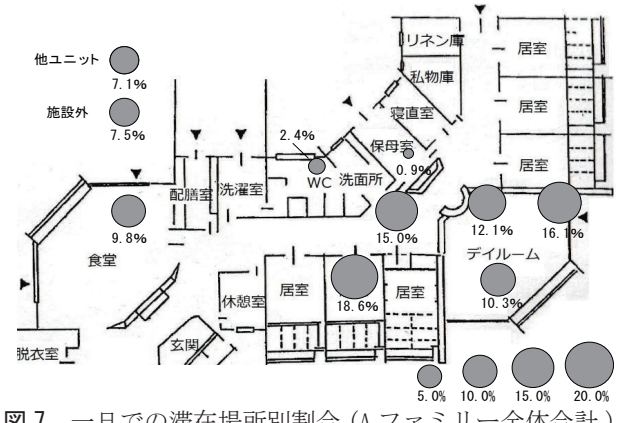


図7 一日での滞在場所別割合 (Aファミリー全体合計)

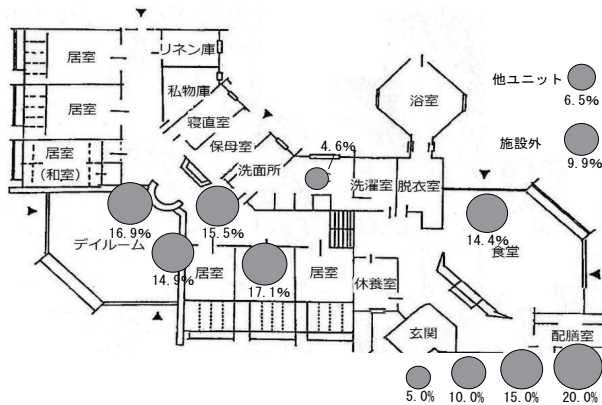


図8 一日での滞在場所別割合 (Cファミリー全体合計)

くことの重要性も示している。

また、この15名の中には精神障害を合わせ持つ利用者が3名(B4、C9、A9)含まれていた。B4さんは、調査中廊下に滞在していた調査員に対して、ほかの場所へ移動させるような動きが見られた。その利用者にとってのテリトリーを意識しているものと考えられる。

4-2 個人別・行為の分析

個人別にみた行為を分析すると、ほぼ全員が「無為」の割合が高いことが明らかになった(図4)。そのほかでは「テレビ」を観るが比較的高い。A7さん(41.1%)、B1さん(40.0%)が突出して「テレビ」の割合が高く、A7さんはダイニングのテーブルそばの床に座ってテレビを観ている時間が長かった。B1さんはダイニングのソファに座りテレビを観ている時間が長かった。

相対的にCファミリーの入居者はテレビを観ている人が少なかった。これはCファミリーにはテーブルが設置されていないことが関係していると考えられる。「テレビ」は施設内での娯楽の中で最も利用されているものである。現在は多くの利用者が「無為」の状態でも過ごすことが多い。「テレビ」が適切なものかはさらに検討が必要ではあるが、「無為」の時間の意味や、その時間の使い方については、丁寧に検証していく必要がある。

4-3 個人別・姿勢の分析

個人別の滞在時の姿勢について分析する(図5)。「立位」と「イス座」が比較的多く見られた。「床座」は少

ないものの、A7さんはテレビを見るためにダイニングの床に座っている割合が高い(61.7%)。

次に割合が高かったC1さんは、ダイニングの床に着座してほぼ1日中滞在していた(58.9%)。高齢者介護施設などでは見られない特徴的な滞在姿勢である。床座を前提とした床素材の工夫なども重要になると考える。

4-4 ファミリー別・滞在場所の分析

ファミリー別に滞在場所を分析した(図6,7,8)。すべてのファミリーにおいて、約半数の割合を「居室」、「ダイニング」での滞在が占めている。全てのファミリーで、最も多い割合となっているのが「ダイニング」でAファミリーが38.5%、Bファミリーが44.1%、Cファミリーが31.8%となっている。

Aファミリーでは「居室」(18.6%)、「廊下」(15.0%)も「ダイニング」同様の割合を占めていた。Bファミリーでは、「居室」(22.3%)と「ダイニング」で全体の6割強を占めた。特に「ダイニング(ソファ周辺)」が27.4%と全体の4分の1以上の滞在であった。Cファミリーでは「居室」(17.1%)、「ダイニング」の割合が50%弱であった。前述したが、Cファミリーのみ「ダイニング」にテーブルが設置されていない。他のファミリーと比較して「トイレ」、「廊下」、「食堂」での滞在割合が高くなっている。

4-5 ファミリー別・行為の分析

ファミリー別に行動を分析した(図9)。すべてで「無為」、「寝ている」の割合が約60%を占めている。

Aファミリーでは「歩行」の割合が14.2%と他ファミリーよりも大きくなっている。Bファミリーでは「寝ている」(21.3%)、「テレビ」(10.0%)の割合が他ファミリーよりも高くなっている。Cファミリーでは「食事」(13.5%)、「無為」(54.4%)の割合が他ファミリーよりも高くなっている。

4-6 ファミリー別・姿勢の分析

ファミリー別にみた姿勢の特徴を分析する(図10)。Aファミリーは「立位」の割合(42.3%)が他ファミリーよりも高くなっている。それに比べてB、Cファミリーは「イス座」の割合が高い。Bファミリーは他ファミリーと比

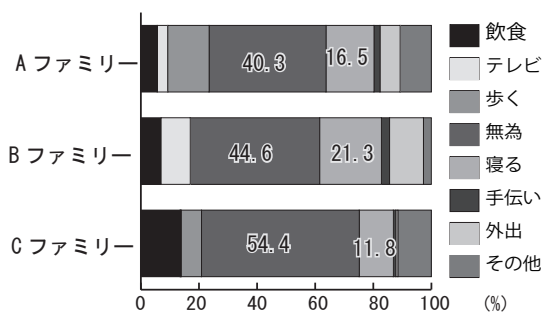


図 9 ファミリー別にみた行為割合

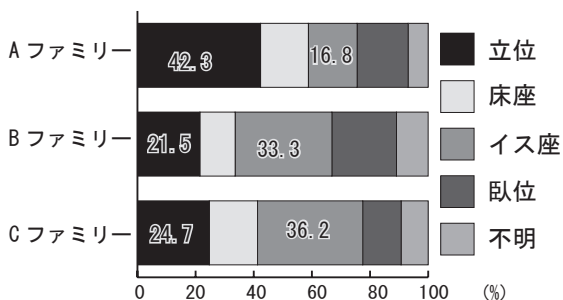


図 10 ファミリー別にみた姿勢割合

べて「寝転ぶ」(22.2%)の割合が高くなっている。

4-7 支援区分別・滞在場所の分析

障害支援区分は、介護給付の必要度に応じて適切なサービスが利用できるよう、障害者等に対する介護給付の必要度を表す6段階の区分(区分1～6:区分6のほうが必要度が高い)のことをいう。今回は対象者数が多かった支援区分4～6の利用者(57人中55人)に注目した。

支援区分別での滞在場所を分析した(図11)。支援区分4は「ダイニング①ソファ周辺」の割合が最も高く(24.7%)、次いで「居室」の割合が高かった(23.2%)。支援区分5は「居室」の割合が最も高く(17.7%)、次いで「廊下」の割合が高かった(15.3%)。支援区分6では「ダイニング①ソファ周辺」の割合が最も高く(20.2%)、次いで「居室」の割合が高かった(15.6%)。

4-8 支援区分別・行為の分析

支援区分別にみた行為を分析した(図12)。全区分において「無為」の割合が最も高く、次いで「寝る」が高かった。支援区分6では「飲食」の割合が最も高い(12.4%)ことから、他区分と比較して飲食に時間がかかることが分かる。支援の必要度が重度になるにつれて、「無為」の割合も高くなり、「手伝い」の割合は逆に減少する。

4-9 支援区分別・姿勢の分析

支援区分別にみた姿勢を分析した(図13)。支援区分4は「立位」と「イス座」の割合が30.1%と同率で高い。支援区分5は「立位」が最も高く(32.3%)、次いで「イス座」が高かった(22.0%)。支援区分6は「イス座」の割合が最も高く(36.6%)、次いで「立位」が高かった(24.7%)。「床座」の割合は支援区分5で最も高く19.6%となった。

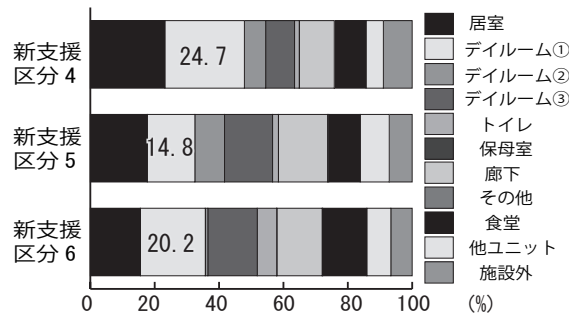


図 11 支援区分別にみた滞在場所割合

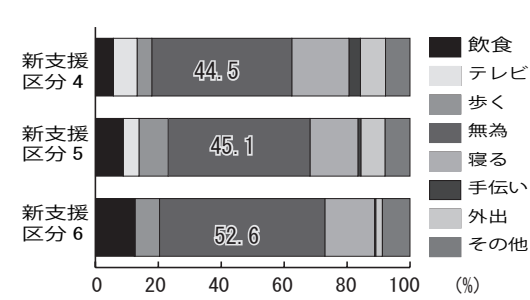


図 12 支援区分別にみた行為割合

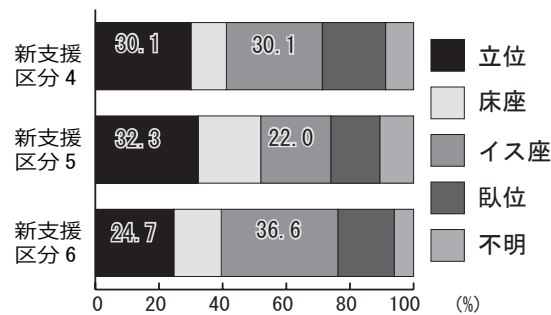


図 13 支援区分別にみた姿勢割合

5. まとめ

今回の調査を通して、現在の施設における空間利用の実態が明らかになった。非常に個性的な傾向が強い滞在様態、行為の様子が明らかになり、「床座」「寝転ぶ」など知的障害者の支援施設において特徴的な姿勢様態も示された。居室の利用頻度も高いが、今度の建て替えにより個室化された時の変化や影響も明らかにしていく必要がある。また、それぞれが固有のテリトリー(領域)を持ち、個性的に滞在をしている様態も明らかになった。これらに配慮した空間づくりも必要になると考える。

行為について見ると、全体的に「無為」が目立った。その割合が高いことは悪いことではないが、ある意味では生活が単調化しているということでもある。施設における生活のあり方と、支援のあり方を検討していく必要性を窺わせる結果である。

今度は、支援の内容、スタッフの空間利用や滞在様態を調査することで、同施設における実態を明確にし、今後の建て替え計画およびその後の運用に資する知見を収集していきたい。

謝辞：本調査は東北工業大学研究倫理委員会の承認を得て実施しているものである。調査にあたりご協力くださった利用者、施設職員の皆様には心から感謝申し上げます。